

氏名	延味 能都
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博乙第 4384 号
学位授与の日付	平成 24 年 9 月 27 日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則(文部省令)第 4 条第 2 項該当)
学位論文題目	Ronsard et les expressions puisées dans l'antiquité - Évolution de leur utilisation - (ロンサールにおける古典からの借用表現 —その使用法の変遷—)
学位論文審査委員	主査・教授 永瀬 春男 准教授 上田 和弘 准教授 萩原 直幸 准教授 Michel De Boissieu 岡山大学名誉教授 木之下 忠敬

## 学位論文内容の要旨

延味能都氏(社会文化科学研究科、准教授)の学位申請論文 *Ronsard et les expressions puisées dans l'antiquité - Évolution de leur utilisation -* (『ロンサールにおける古典からの借用表現—その使用法の変遷—』)は、16世紀のフランス詩人ピエール・ド・ロンサールを研究対象とする著者が、これまで各種紀要あるいは国際専門研究誌(『ロンサール研究 *Revue des Amis de Ronsard*』)等に発表してきた日本語および仏語による論考十数編を、今回すべて仏語に改め、結構を整え、序と結論を付して全 394 頁にまとめたものであり、著者の長年にわたるロンサール研究の集大成となるものである。

全体は 3 部構成、計 11 章、及び付論と資料からなる。著者はまず、ロンサール詩篇において反復使用される特定の表現をコンピューターを駆使して抽出する。これらの表現は、従来の代表的刊本たるローモニエ版とプレイヤッド版においては、編集者によって見過ごされるか、あるいは研究対象としてほとんど意識されなかったものであるが、著者はそれらの多くが主として古典古代、特にラテン期の詩人たちからの借用である事実を明らかにする。次に、それらの表現を自己のフランス語作品に取り入れるために詩人がいかなる工夫を加えたか、その変遷を異なる詩集間での異同、および度重なる再版におけるヴァリエーションを通して丹念に跡付け、古典古代から多くを摂取しつつも、ロンサールの創作がいかなる独創性を獲得したかを解明する。さらにその検討過程で、著者は、これまで指摘されてこなかった幾つもの典拠を初めて提示することに成功した。

論文第 1 部「ロンサール詩における頻出表現、その古典古代との関係」では、まず導入部として、ロンサール詩において反復される類似表現に着目し、従来の研究方法がこうした表現を十全に把握しえなかったこと、現代ではコンピューターの利用によって網羅的検索が可能になり、新しい研究の道が開かれた事実を指摘する。以下具体例の検証に移り、<目(œil, yeux)>(第 1 章)、<je ne sais quoi>および<砂糖、蜜(sucre, miel)>(第 2 章)、<豎琴の弦にのせて(dessus les nerfs de ma lyre)>(第 3 章)などの表現を取り上げる。著者はこれらの表現の多くが、古典古代の作家からの借用である事実と、ロンサールが意

識的にそれを変容させ、必要に応じて削除あるいは補足した事実を示す。著者の研究によって初めて発見された表現もあり、これによって過去の二大刊本に対する注釈の追加が必要になったといえる。

第2部「特徴的表現の分析」では、テーマ研究の観点から、5つの主要主題を検討する。まず、死者の魂を渡すにあたってのカロンとバルカの協力というテーマは、デュ・ベレーによるホラチウスの模倣に由来する事実が明らかにされる。しかしここでカロンの小舟は詩人の名声を後世に運び、死を超越させる詩の小舟となる(第1章)。続いて、詩人の条件を列挙する際に現れる< si quelqu'un souhaite >という表現がプロペルスを経てヘシオドスに起源を有すること(第2章)、ミルテをめぐる表現はウェルギリウスやカトゥルスに想を得つつ、死んだ恋人たちが幸せに暮らす楽園のイメージを喚起すること(第3章)が示され、その過程において基準刊本が見逃してきた典拠に関する若干の修正と追加が提案される。さらに、キツタ、ブドウ、葉に記される恋文というテーマの考察では、ロンサールの3つのソネの制作に関する仮説を提示する(第4章)。ナツメヤシをめぐるのは、この植物が栄光を表すほかに、十字軍における王家の勝利をも意味することが明らかにされ、ここでも、基準刊本に対する10を超える注記の追加が提案される(第5章)。

第3部「バラとユリ、およびその共出現」はテーマ研究を発展させ、バラとユリというロンサール詩において格別の意義をもつ主題を、この2主題が共出現するケースに着目して考察する。白ユリと深紅のバラは、誕生・結婚・葬儀の際に散布する花として、あるいは泉や川への供花として現れ、賞讃の象徴となり(第1章)、あるいは春や平和の象徴として用いられる(第2章)。最後に著者はユリの色彩に注目し、女性の肌を表すバラ色のユリ、王家の象徴としての黄のユリ、王の死を表す黒ユリなどの表現を考察する(第3章)。

以上見てきたように、本論文は、ロンサールの詩作品をラテン期を中心とする古典古代の作家たちとの比較のもとに綿密に検討し、詩人による借用と創造の多彩な局面を解明するとともに、ロンサールの代表的刊本に対する少なからぬ注記の修正と追加を提案している。

## 学位論文審査結果の要旨

学位論文審査会は6月28日(木)16時15分から18時まで、学外からの招聘教授1名を含む5名の審査員によって開催された(文法経1号館、仏文系セミナー室)。

延味氏の論文の第1の特徴は、コンピューターによる語彙調査と文献学・文体論・主題研究等を結びつけた独自の方法にある。ロンサール詩と古典古代の作品双方における頻出表現の遺漏のない把握、とりわけ複数の表現の共出現(occurrence conjointe)の把握などは、情報処理技術を十二分に活用した成果であり、こうした方法をもたぬ過去の研究には望みえないものであった。

こうした方法に依拠しつつも、同時に本論文の手柄は、文学作品としての細部にこだわり、その具体的な魅力をすくいあげることに努めた点にもある。神話的題材や植物をめぐる表現を通して、古典古代からフランス・ルネサンスへと続く西欧文化の伝統の一端を明らかにし、古典古代の模倣から出発しつつも、卓越した詩業を残した詩人の創作法を解明した。

質疑応答においては、古典古代と16世紀の中間に位置する中世文学との関係、模倣・剽窃・独創概念の関係等について、活発な議論が展開された。

本論文は、広範な資料の渉猟を踏まえた、興味深い指摘を多々含む労作であり、これまでの基準刊本が見逃していた典拠に関する新発見約10件、注釈への追加・修正提案約30

件を含むなど、重要な成果をあげている。また、本研究のもとになった諸論文は、過去10年間に3度にわたる科学研究費の支給（平成13-14年度、16-18年度、20-22年度）を受けており、学会での評価の高さがうかがえる。近年の論文はほとんどフランス語によるものであり、海外への意欲的な発信の姿勢も評価できる。

以上の判断に立ち、審査委員会は、全員一致して、本論文が博士の学位にふさわしいものであるとの結論に至った。